

けいはんな市民雑学大学 講義記録

2008年4月26日(土)

南山城は戦後に「山城国一揆」と出会った

市民教授 中津川 敬朗

報告したい内容(レジュメ)

はじめに：今、山城国一揆は小・中学校の社会科教科書に載っている。

- ・山城国一揆の範囲は、山城国上三郡の久世・綴喜・相楽の三郡である。
- ・「一揆」とは、心を一にすることというのが本来の意味である。
- ・現代の人々は、小学校6年生の社会科で山城国一揆と出会う。

1. 私たちは1952年に山城国一揆の人びとに出会った。

山城国一揆は五百数十年前に起こったが、私達が出会ったのは1952年(昭和27年)。上粕に歴史調査に来ていた京都大学の若い研究者が家に宿泊し、夜遅くまで話してくれた言葉に衝撃を受けた。

「それぞれの村には、それぞれの村の人たちの長い歴史がある」

当時は、田舎には歴史はない。歴史があるのは中央だけと考えられていた。

2. 国一揆は明治末年に発見され、戦中に系統的な研究が進み、戦後に「大衆化」された。

・1912年、京都帝国大学の三浦周行(ひろゆき)が内閣文庫に所蔵されている興福寺の古文書によって、そこに詳しく書かれていた山城国一揆のことを、論文「戦国時代の国民議会」にまとめた。

当時中国では辛亥革命が進んでおり、それと山城国一揆の類似に目を向けて、わが国の自治体の起源を研究するというテーマで調べたのだった。

・1939年、日中戦争の時、鈴木良一がまとめた『應仁の亂に関する一考察』が東京帝国大学の「史學雑誌」に載った。

・1953年、当時の上粕町の人たちを中心にして城南郷土史研究会が結成された。

そして、京都大学の熱田公(あつたいさお)を指導者として、中津川保一(父)、地域在住の高校生だった赤塚康雄、奈良今在家の岩井慶信と大学生の私の5名で共同研究のグループが発足した。

1954年夏に「共同研究山城国一揆」として発表。400部印刷した。

これが地域の皆さんに具体的な山城国一揆の様子を知らせた最初のものになった。

黒川直則氏(元京都府立総合資料館次長)は「山城国一揆は三浦周行により『発見』され、鈴木良一によって『体系化』され、中津川保一・敬朗父子が中心となった機関誌『やましる』により『大衆化』された」

- ・ 山城国一揆後 500 年が過ぎた 1985 年、日本史研究会が中心となり山城国一揆 500 年記念シンポジウム「山城国一揆とその時代」が開催された。
この頃から新たな研究活動が始まり今に続いている。
- ・ 国一揆は、戦後の教科書には記されているが、東京帝国大学教授 辻善之助氏の大日本年表には全く記されていない。
このことは史実の評価が時代によっていかに変わるものかを示している。

3. 奈良興福寺大乘院門跡の尋尊（じんそん）が日記に記録していた。

尋尊の日記には、8 年間にわたり地域の武士が南山城を「統治」した様子が詳しく書かれている。

文明 17（1485）年秋になって、両畠山軍の大部隊が南山城で対陣し、村々は荒れ果て、農民はもとより、村々の指導者であった武士やその頭である国人にとっても、抜き差しのない事態となった。

文明 17 年 12 月 11 日、尋尊の日記

両軍に組みこまれていた国人衆は、住民の支持を受けながら、周到な準備をして立ち上った。

『今日、山城の国人集会（しゅうえ）す、上は六十歳、下は十五、六歳と云々、同じく一國中の土民等群集す、・・・』

両軍撤退は困難を極めたが、ねばり強い交渉を行ない、礼銭を払い、「去状」を受け取った。

4. 国一揆の時代の資料、遺跡、遺物は、人びとの暮らしの中に残っていた。

尋尊は文章と一緒に絵図まで書いていた。

例えば、尋尊の日記に描かれている絵図に木津川は「大川」と書かれている。私達地元住民は、木津川の事を「母なる川」という意味で大川と呼んでいる。

5. 山城国一揆は、南山城の人びとの心に生きるようになった。

500 年前に、この地の人々が命を掛けて守ろうとしたのは何だったのだろう。

武士・村人など、様々な立場を超えて何を作ろうとしたのだろう。

「戦乱の中で平和を作って自らが政治をする自治の社会を作ろうと考えた」のだと思う。

おわりに：人びとは平和と自治の地域づくりを目指した。

けいはんなに住んでいる人々が、かつての惣村や惣国が目指した自治の社会、お互いの連帯を作っていくと、新たなより広い地域社会ができるのではないか。

<会場からの質問>

Q：山城国一揆がその当時の時代にどのようなインパクトを与えたのか？

また、日本史の歴史の中で山城国一揆はどのような位置づけなのか？

A：読みきれていない。山城の国一揆そのものは今の子供たちが学ぶ歴史の勉強の中では庶民のひとつの活動として取り上げられている。

応仁の乱は、山城国一揆がおこって東西両軍の対立がなくなり新たな戦国時代に入った。極端な言い方をしたら山城国一揆によって応仁の乱が終わったと、地元住民としては想いがある。

山城地域はかつてあった惣村が団結の基盤となり、近世の村ができてきた。

山城国一揆の自治の中身は近世の村々の連帯に生かされるようになったといわれている。

Q：江戸時代に、藩や城下町で文化が発展するということがあったが、この地域はどうか？

A：この地域は連帯性が強い。

Q：例えば岐阜は江戸時代に分割統治されてしまい、地域の連帯が弱かった。

ここは分割統治されたのだけれど、地域で結びつきがあった。

それは山城国一揆以来の伝統があったからではないか？

A：この地域は惣村の団結が強かった。

木津川の川さらいを命じられた時、領主は違う76か村いっしょに奉行所へお願いを出したこともあった。

お宮さんの神事を中心に惣村が団結していた。

Q：応仁の乱をやめさせたということはこの地域はほかの地域にはない特徴。

古文書にはお金を払ったと書かれているが、たくさん使っただろう。

ここは結構豊かな土地だったのではなかったのだろうか？

A：豊かな土地なので、京都の貴族にとっても奈良の寺社にとっても、この土地はほしい土地だった。

記録されているものから、この土地の農産物は大変種類も多く豊かだったことがわかる。

Q：S27年ごろ出会われて5人で古文書を勉強された。

情報入手手段が今ほどないその時代に5人が集まり古文書を読むというきっかけ、なぜ人が集まって古文書を読もうと思ったのかがその風土や背景が不思議に思った。

A：私たち親子と赤塚氏は、村の東にある青年達の溜まり場で地域の歴史を調査に来ていた熱田公氏などと常々夜遅くまで話をしてもらっていた。

行商で薬をこの地域に売りに来ていた奈良の今在家の薬剤師岩井慶信さん（上狛出身）は地域の歴史に興味を持っていた。

国一揆ではこの5人が出会った。